

栗原霞崖 南画家

1861(文久元)年～1940(昭和15)年

1. 経歴・狭山市との関わり



1861(文久元)年6月1日、入間郡水野村(現・狭山市水野)に農業を営む栗原家の次男として生まれる。本名は栗原伴司。幼少期から絵を描くことを好み、早くから才能を発揮し、画才が認められた。1899(明治32)年、24歳で埼玉県所沢町下仲丁(現・所沢市寿町)のひな人形店・雛忠商店(店主は二上忠蔵)に弟子入りし、節句のぼりの絵師に弟子入りし見習いとなる。十年余の年季が明けると、雛忠から独立。際物商の店を構え、幟旗・羽子板・絵馬が大変な好評を博し、注文が殺到した。

絵師・一川三光に弟子入りし、「月洲」と号する。その後、入間郡入西村(現・坂戸市)出身の南画家・高橋南崖に師事し、「霞崖」と改めると、師匠直伝の南画に没頭する。縁起物を得意とし、花鳥・山水や人物を端整な筆遣いで繊細に描き、進取の気持ちで研鑽を怠らず、自信作《七人美人》を描き出す。その後、写生画家・丸山応挙と浮世絵師・河鍋曉斎の画法を取り入れ、作品を繊細に描き切った。そして晩年まで創造力は衰えず、1940(昭和15)年4月15日、80歳(数え年)で生涯を終える。ちなみに、南画とは、文人が余技に描く中国の影響を受けて日本で生まれた絵画のこと。

2. 主な業績

- ・1912年 「栗原霞崖」で帝国絵画協会の会員になる。
- ・1915年 南入曾の入間野神社に絵馬「入曾の獅子舞を奉納する。
- ・1916年 『帝国絵画名鑑』に「栗原霞崖」で名を連ねる。
- ・1921年 全国絵画実力調査会展に《寒江独釣之図》を出品し、名誉一等に入賞し、金杯を授与される。
- ・1922年 東洋美術展覧会展で《鍾馗》が特選を受賞する。
- ・1924年 全国絵画実力調査会展に南画を出品、入選を果たす。
- ・1939年 絶筆とされる《達磨図》を描き上げる。



《鬼に鍾馗》
一九三〇年制作

3. 特筆

「伴司さんの作った飾り花は、雨が降っても色が落ちない」という逸話が残る。お手本を所望されても謝礼を受け取らず、南画の画法を惜しむことなく教えた。また、読み・書き・そろばんを教示するなど、職人仲間の資質向上に尽力する。

〈参考文献〉狭山市立博物館 平成7年度夏季企画展「栗原霞崖展」図録、〈協力〉吉田 弘

文責・権田 恒夫 2025. 2